

『源氏物語』の子ども―「暗」を照らす「明」としての存在―

田辺玲子

―はじめに―

西木忠一氏は次のように述べている。

宿世の思想に生きた平安時代の貴族たちは、「生」よりも「死」をより重視する日々を過ごした。『源氏物語』全編における出生者が主人公光源氏にはじまり、蜻蛉の巻で左近少将の子（常陸守の娘腹）に至る二十名に満たないというのに、死者数が四十余名の多きに達している。こうした事実から『源氏物語』の作者もいかに「死」に心を労していたかが窺えよう（注1）。

私の疑問は、にもかかわらず紫式部は『源氏物語』中で、なぜ子ども「死」を全く書かなかったということである。唯一の例外として「渡し守りの孫の童、棹さしはずして（宇治川に）落ち入りはべりにける」（浮舟159）の例が考えられるが、この童は物語の本筋とは無関係な人物であり、単に宇治川の流れの恐ろしさを説明し、浮舟の入水の思いつきのヒントとなる挿話なので、本論では子どもの死の用例として正式には数えない。

もっとも子ども描写を駆け足で済ませ、等身大の写実的な子ども描写に力を注がないというのは、平安時代の作り物語全体の特徴であるとも言われている（注2）。その観点から見れば、現実には少なくなかった子どもの病氣や夭折を作品中にとりいれなかった点は、『源氏物語』と言えども例外ではないということになる。しかし、西木氏が指摘されるよ

うに『源氏物語』では登場人物の「死」自体は四十三例と多く、作者が力を入れたとわかる詳細で感動的なものも少なくない（桐壺更衣・夕顔・葵の上・藤壺・紫の上・柏木・大君など思い浮かべればわかる）。

ちなみに『源氏物語』以前の『宇津保物語』では登場人物の死は直接描写・間接描写を合わせて十例ほどある（俊蔭の妻・俊蔭・俊蔭の娘の乳母・忠こそその母・千蔭・仲澄・真砂君・季明・藤英の父母と親戚・俊蔭の娘の嫗）。また『源氏物語』の強い影響下に書かれたと言われている後期物語三作品では、『夜の寝覚』での死の用例は六例（男主人公の父関白・大君と中の君の母・中の君の乳母・大君・中の君の夫老関白・朱雀院）、『浜松中納言物語』は三例（主人公の父・吉野の尼君・唐戸・狭衣物語）は十例（飛鳥井の女君の父母・飛鳥井の女君の乳母の夫・今姫君の母・嵯峨院皇太后宮・飛鳥井の女君・式部卿の宮・故式部卿宮の尼君・一品の宮・常磐の尼君）である。源氏物語に比べると他作品の「死」の用例自体が圧倒的に少ないことがわかる。ゆえに西木氏の調査によると、登場人物の「死」（四十三例）が「出生数」（十七例）の二・七倍もある『源氏物語』に限っては、子どもの死が全く含まれないことが、やはり疑問に思えてくるのである。

尚ここで私のいう子どもとは、主に元服・裳着以前の子どもをさす。『源氏物語』では元服・裳着年齢の若年化も見られて（注3）、定義も難しいのだが、大雑把に言って十四歳以下くらいをさすとしておく。

では、まず『源氏物語』の書かれざる世界―子供の死と病氣を描いた他作品を平安時代のものを中心に見てみることにする。

I、貴族や受領層の子供の死の用例

①『土佐日記』紀貫之亡くなった女兒への思い

松村誠一氏は小学館古典文学全集『土佐日記』の解説で次のように述べている。「全編を通じていたる所に、忘れようとしても忘れられぬ亡くなった子を思う切々たる気持―後略」

この話は『今昔物語集』巻24・第43、『古本説話集』上・41、『宇治拾遺物語』12・13にもある。『今昔物語』では「年七つ八つばかりありける男子」、『宇治拾遺物語』では「七つ八つばかりの子」となっている。しかし、『土佐日記』では「女子のためには親幼くなりぬべし」と明記されているので、一応死んだ女兒のことを書いたものと考ええる。

平安時代の女兒が美しい目を集めることに夢中になったことは『堤中納言物語』の「貝合」にも書いてある。貫之も泊りの浜で「くさぐさの麗しい貝・石」などを見て死んだ女兒を思い出し「忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ」と歌を詠む。『源氏物語』では船旅の場面で『土佐日記』のように親が亡くなった子供を思い出す所は皆無である。反対に『玉鬘』の冒頭で、四歳の玉鬘が乳母一家と筑紫に下る舟に乗った時に「母の御もとへ行くか」と聞いて、一行の者が不憫がって涙ぐむシーンがある。この時、母夕顔は既にこの世の人ではないのである。『源氏物語』では、いたいけな子供は死なないで周囲の献身的な大人達に守られて育つケースが多いが、これもその一例であると思う。だが、この①には作者の虚構を指摘する説が藤岡忠美氏にある（注4）。即ち、帰京した貫之がパトロンの存在であった兼輔、定方の逝去

による喪失感を、亡児への哀惜という虚構の手法で表現したという解釈である。仮に藤岡氏の説に従えば、幼い子どもの死というのは、人間のやりきれない悲しみの心を表現する文学的手法として、きわめて有効なものとなんて見なされていたことが、逆にわかってくるのではないだろうか。

②『蜻蛉日記』上巻・町の小路の女の産んだ男児の死

かうやうなるほどに、かのめでたきところには、子産みてしより、すさまじげになりたてたべかめれば、人憎かりし心思ひしやうは、命はあらせて、わが思ふやうに、おしかへしものを思はせばやと思ひしをさやうになりにしてはてはては、産みののしりし子さへ死ぬるものか（集成33）

あまりにも有名な部分であるが、「産みののしりし子さへ死ぬるものか」と日記に書き記した作者は、その子どもの死が兼家と町の小路の女の關係に、終止符を打つ決定打になることを信じて、あからさまな快哉を叫んだのであろうか。新潮集成の巻末年表によると、このあたりの日記の年次がはっきりしないとしつても、男児の誕生（天徳元年957夏）の翌年のことかとしているので、この子どもは生後一年程度で亡くなったのであろう。『源氏物語』では、生まれた子どもたちは皆、病氣にもかからず、すくすくと育っていくケースが多い。「宿木」で、中の君が勾宮との間の若君を産む。そのことで、夕霧の六の君に圧倒されたかに見えた中の君の妻としての地位が再び浮上した。

右近「（中の君に）若君、生まれ給ひて後は（六の君よりも）こよなくぞおはしますなる」（浮舟113）

くる。だが『大鏡』にも「おさなき人はさのみこそはおもへど」（大系頭注）子供は皆そんなものだと思うが」とある。『大鏡』の福足君の舞のエピソードは、やんちゃできかん気な少年の自然な姿に思える。また、平安時代の私家集にも幼い子どもの死を詠んだものがいくつも見られる。詞書から詠歌事情が推察されるものが多いが、いずれも子どもに先立たれた親の哀切きわまりない心情が読み取れる。以下に三例あげる。

・『伊勢集』

「このみかどにつかうまつりて生みたりし御子は、いつつといひし歳うせたまひにければ、悲し、いみじ、とは世の常なり。嘆く物からかひなければ『世にあらじ』とおもふも心になはず、夜昼恋ふるほどに、この『みつ』とつけたりし人のもとより」

二六思ふより言ふはおろかになりぬればたとへて言はむ言の葉ぞなき

「さらに物もおぼえねば、かへりごとせず」

「又の年の五月五日、ほととぎすのなくを聞きて」

二七死出の山越えて来つらんほととぎす恋しき人のうへ語らん

「いまは身を心うがりて、ただ宮つかへをのみなむしける」

・『順集』

「応和元年（961）七月十一日に、よつなるをんなごをうしなひて、おなじ歳の八月六日に、又いつつなるをのこ子うしなひて、

と語られ、その若君は「ゆゆしきまで、白くうつくし」（宿木）という赤ん坊で「いとうつくしうおよすけ給ふ」（浮舟）のであった。町の小路の女が、兼家の愛情と子どもの双方を失ったことと比べる時、（物語の中では一人も勾宮の子を産まなかった）六の君にけおされなかった中の君の幸いは、子を産んだこと、その子が健康に育ったことによるものとわかってくる。紫式部は紫の上のように、愛する人の子を授からない女については真正面からとりあげて書いたが、生まれた子どもに幼くして先立たれる話や、その事によって変化する男女の愛情世界については一切書かなかった。この点はずっと注目されるべきではないだろうか。

③『拾遺集』巻第二十 哀傷 粟田右大臣（藤原道兼）

「ふくたると言ひ侍ける子の、遭水に菖蒲を植へ置きて亡くなり侍にける後の年、生ひ出でて侍けるを見侍て」

二二八一のべとやあやめも知らぬ心にも永からぬ世のうきに植ゑけん
『大鏡』に祖父兼家の御賀で舞を舞うのを嫌がって、髪をむしりとり装束をびりびりと破ったエピソードもある「大ごねぶり」で知られた道兼の長男福足君の死を父の道兼が詠んだ歌である。『大鏡』では、蛇をいじめた祟りで頭に腫れ物ができて死んだとある（『小右記』永祚元年989・八月十三日にも記事あり）。『拾遺集』のこの歌は、『源氏物語』にはついに一人も登場しなかった、典型的な「大ごねをこねる子」の夭折を悲しむ親の歌である。この歌からは『源氏物語』が意識的に切り捨てた現実の子どもの姿と、その死がもたらした親の悲哀が伝わって

無常の思ひ、ことにふれておこる、かなしびのなみだかわかず、
古万葉集の中に沙弥満誓がよめる歌の中に、世の中をなににと
へんといへることをとりて、かしらにおきてよめる歌十首」

一九世の中を何にたとへんあかねさす朝日さすまの萩のうへの露
(一二〇～一二八は省略)

・『実方集』

「こそ君といふこなくなりて、七月八日、あさばらけに」

四四たなばたの今朝の別れにくらぶればなをこはまさるこちこそすれ

「おなじころこのなき人(こそ君)を泣き寝の夢に見て」

四五うたたねのこのよぬゆめのはかなきにさめぬやがての現ともがな

Ⅱ、子供の病気に直面した時の母の歌

①『紫式部集』娘、賢子の病気を詠んだ歌

「世を常なしなど思ふ人の、幼き人の悩みけるに、から竹といふも
の瓶に挿したる女ばらの祈りけるを見て」

五三若竹の生ひゆく末を祈るかなこの世を憂しと厭ふものから

普通、子への愛情をよむ時、上の句から直線的に母の子に対する感情が一貫しているものである。下の句のムードを思い直してふり払おうとしているものの、上の句からはなお、ひたむきな母性に徹しきれない嘆きが一首を読み終わった読者の心に伝わって来るように感じられる。

両氏ともに式部の母性の特異性に言及している点が注目される。曾祖父兼輔の歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」を繰り返し作中に取り入れた式部であったが、当人はむしろ「子ゆえの闇」の次元の親心に安住することができなかった人であったということであろうか。そう考えると、『源氏物語』に子どもの病気及び死を書かなかった意味もやや見えてくる。式部が追求したのは、幼い子どもの病気や死が原因で起こる不幸と悲しみの世界ではなかったであろう。登場人物自身の内面の問題をこそ、掘り下げて書きこみたかったのだと思う。故に成人前の子どもの病気や死という、あまりにも簡単に読者の同情を誘う題材は敢えて使わなかった、とは考えられないだろうか。

さらに、清水氏、稲賀氏に次いで難波浩氏による次のような解釈がなされている。

式部はこの世の無常を強く感じながらも、それに没落してはいなかった——中略——この歌で、式部が表現しようとしたのは、たしかに子どもへの親心であった。しかし我々がこの歌から客観的に汲みとりうるものは、式部は世の無常を感じ、この世を憂しと思いつつも、決して人生のすべてを捨て去った虚無感の持ち主ではなかったという点である(注8)。

『源氏物語』中には、子供の死や病気を全く書かなかった式部の、現実の人生における唯一の、わが子の病気に触れた歌である。河内山清彦氏は「夫をなくして襲いくる底知れない悲愁と厭世感の中において病気の幼な児の当座の快癒のみならず、将来の安全と幸福を祈ってやまない母性の真情の流露が見られる」(注5)と、式部の母性の性質を素直な一般的なものとしてとらえた解釈をする。が、次にあげる二氏の見方は少し異なっている。まず清水好子氏は『紫式部』(注6)で次のように述べる。

「世を常なしなど思ふ人」は式部自身のこと、
「幼き人」は宣孝との間に儲けた一女の賢子。二、三歳であろう。幼児が病気になるので、お呪いに、若竹を瓶に挿したのを女房や乳母などが御祈禱をしているのであろう。傍らで式部も、どうぞ子供の病気が癒りますように、元気で長生きしますように祈っている。が、その自分はいえはつくづくこの世の中はどうなるかわからない。厄にでもなりたいたいと思っているのだと、二つに割れた心を見出している。「途に子供の回復を祈る歌ではないのである——中略——式部が子供への愛を歌った歌はほかに一首もないが、これは生きる力も失った式部の中から滲み出た脂のような母性の歌である。と同時にここのように際にもその自分が間接的に観られているのは注目に値する——中略——式部は母親として身を砕く生き方、其だけにまた一面救われる所もある日々が送れなかった人ではなからうか。」

又、稲賀敬二氏も『日本の作家 紫式部』(注7)で、次のように述べている。

紫式部という作家の単純に分析することの難しい特性を、的確に深く捉えた解釈であると感ずる。清水氏や稲賀氏のいう如く式部は、世間一般の母性愛というもので括ってしまうことができない資質の持ち主であったという見方もできる。しかし、難波氏のいうように、子どもの持つ美しさや明るさの価値を愛し信ずる精神も、一方で確かに持っていたのだと思う。ゆえに子どもの病気や死の場面を書くよりも、子どもの持つ生命力のすばらしさを書く方を選んだのではないかと考えられる。

補足として、式部の五四番歌(国歌大観では五三番歌)を初めて単独で論じたとされる桑原一歌氏の論(注9)にも少し触れておく。桑原氏は五四番歌は次の二首と強い関連性があると指摘して論を展開されている。

・古今集の大河内躬恒歌「物思ひける時、いとなき子を見てよめる」
九五七今更に何生ひづらむ竹の子の憂きふししげきよとはしらずや

・源氏物語「横笛」の幼い薫に対する源氏の詠歌
うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける

この二首と紫式部集の五四番歌について桑原氏は次のように述べておられる。

それぞれの内容は厭世観を下地としていることは同様である。しかし、幼児に対して反語的に生を受けたこと自体を問いただすという躬恒の和歌が最も厳しいものといえる。それに対して、厭世的な心情を抱きつつも、我が子の成長を祈る気持を倒置を用いて前面に出すと

いう『紫式部集』五四番歌は、躬恒の和歌とは対照的といえるだろう。
—中略—『源氏物語』の光源氏の詠歌は、密通事件や薫の出生という
重い秘密を抱えた直後の柏木の述懐とは異なり、薫を自らの子として
受け入れようとする、重要な転回点とも言える詠歌である。

桑原氏は「横笛」の源氏の歌には、河海抄以来指摘のある古今集躬恒
歌が引歌であるのと同様、紫式部集五四番歌も躬恒歌をふまえており、
家集が物語の材料となったのであろうとされる。そして、五四番歌と源
氏の詠歌に「子供の存在そのものは捨てきれないものとして許容する」
内容の共通を指摘されている。式部の「子ども観」と、作品への投影を
考える上で、意義ある解釈だと感ずる。

②『和泉式部集』

「幼きちこの病みけるを、あはれと思ふべき人の聞きて、いかかと
いひたる」

八二八いばかり思ひおくとも見えざりし露に色へる撫子の花

馬場あき子氏は『和泉式部』（注10）でこの歌を次のように解説して
いる。

長保三年（1001）に生まれた道貞の第二子が、ちょうど「幼き
ち」というべき年令に達していたこの時期に属する歌であろう。離
婚後ではあったが「あはれと思ふべき」父親として、道貞の方から病
氣見舞いの問い合わせがあったものとみえる。

夫と死別した紫式部と異なり、離婚した和泉式部の元に届いた前夫か
らの子どもの病気を気づかう文に対する返歌であろうか。夫婦の仲がこ
われた後も子どもの存在が僅かに二人を結びつけるよすがになっていた
というのは、現代と変わらないように思える。「横笛」で夜中に乳を吐
き、寝おびれる赤ん坊をめぐる夕霧と雲居雁夫妻のやりとりがあるが、
夫婦の心が食い違っただけで来始めた時に、子供の不調が共通の心配事として
僅かに二人を結びつける役割を果たしているとも読める箇所だと思う。
『源氏物語』に子どもの病気の用例はないとしたが、「横笛」のこの部
分にやや近いものがあるともいえよう。ただし、命に関わるような深刻
な子どもの病気の例は皆無である。

Ⅲ、古記録（貴族の漢文日記）と歴史物語に見る子どもの死

①小野宮実資『小右記』六歳の女兒の死

・正暦元年（990）七月四日

女小兒從今日有齒煩

・同六日、己卯、

小兒病極重、非他事、痢病数々、不可敢留、立種々大願—中略—兼彼
闍梨立可令奉造等身藥師佛之願—後略。

・同七日、庚辰

小兒所惱極重、立内外大願捨彼兒所用之銀器等—中略—病兒痢無數、
起居難堪、於兒枕上、令平美師始誦千卷金剛般若經—後略。

・同八日、辛巳

—兒病（欠字）重、失心神—後略。

・同九日、壬午、

—今夜半許小兒已以不覺、仍令授五戒—中略—以所用銀器皆捨佛界、
又又同捨枕上銀、以櫛篲修諷誦、（清水寺）—後略。

・同十日、未

及曉更小兒蘇生、余自致種々祈、頗有神感—中略—晚景兒女重惱（欠
字）廣緣師加持

・同十一日、甲申、

申剋小兒入滅、悲歎泣血、先是立種々大願、兼刺重三人首、令授戒、
不耐悲慟、通夜令加持。

『小右記』の詳細な記述から、この女兒の容体や加持祈禱の様子、銀
器や銀（髪飾り）櫛などを喜捨したことがわかる。死後の葬り方（令裏
小兒）や、七日ごとの諷誦に関する記述もこの後に続いている。実資の
悲嘆ぶりは痛切に伝わってくる。しかし、驚くべきことは、翌月（八月
廿一日）の記述に、早くも女兒祈願が見られる点である。

「令申乞女子之祈願也、依亡兒遺愛殊所祈請也」

服藤早苗氏は、この実資の祈願を「上層貴族にとっては、女子の出産が
まず待たれた。それは天皇に入内させるためである」という説の一例と
してあげている（注11）。そう考えると、女兒の夭折に対する悲しみの
中に、家の繁栄の元となる大切な切り札をなくしたという失望が含まれ
ていたということになる。

②藤原行成『権記』

・長徳四年（999）十月十八日

去年誕生男兒没、在嬰孩容貌甚美、日者煩熱瘡、今日瘡氣少伏、依

見無力之氣、母氏雅樹、以居、愛感之甚也、幼少之者氣力無頼、仍為
不触穢、下立東庭、暫之母氏悲泣、即知兒亡之期

行成の満一歳にもならないで夭折した男兒の記録である。とても美し
い子どもであったようである。母親の悲嘆の激しさが伝わってくる記述
である。『権記』にはさらに悲痛な記録がある。

・長保四年（1002）十月十六日丁丑

西方尼被示誕生女兒只今天亡事、甚非常也、産婦病甚重、不令知云
々—病者終日甚苦惱、只湯治之時頗有其隙云々—請為尼—丑剋氣漸絶、
悲慟之極何事如之、指臨終之間心神不乱、自去永延三年八月十一日以
後、于今十四年、母子之命一日忽没、松羅之契千年相愛、所生子忽七
人、三人已天、

この女兒の誕生は前々日十月十四日のことと『権記』にある。産後二
日めで亡くなったのである。産婦も重病であったため、ショックを与え
まいと子の死は伏せられていた。それで産婦は赤ん坊のために、氣力を
ふりしぼって薬湯を飲んだのであろう。だが、死を覚悟して出家を願
い果たすと同時に息絶えた。妻子を同日に失った行成の悲しみは激しかっ
た。服藤氏はこの記事を『平安朝の母と子』の「第三章 生命を賭した
出産」の中の「若年多産」の一例としてあげ、次のように述べている。

（行成妻は）享年二十七歳だったというから、十三歳で結婚し、十四
年間に七人の子を産み、そのうち三人の子を早く失い、自身亡くなっ
てしまったのである（注12）。

当時の幼児死亡率の高さを如実に示す資料であるともいえる。また源氏物語「葵」の巻では夕霧を出産した日に葵の上が亡くなっている。左大臣夫妻や兄の頭中将、そして夫源氏の悲嘆は読者に強く伝わってくる。しかし、「若君のいとゆゆしきまで見えたまふ御ありさま」と、理想的な容姿で健康に生まれた子ども夕霧は、源氏にとっても「かかる形見さへなからましかば」と、せめてもの生きる支えであった。源氏物語では若い母親は出産が元で亡くなっても、お産による赤ん坊の夭折は一例もないのである。

③『栄花物語八』はつはな、寛弘五年（1008）五月二十五日、定子の二女姦子内親王

かくてかの女二宮はいとあやふくおはしまして、岩蔵の律師からうじてやめたてまつりて、仏の御しるし嬉しげなりしに、この頃にはかに御心地起らせたまひて、このたびはほどもなく重らせたまひて、うせさせたまひにけり。今年は九つにぞおはし申しける。

母の定子は姦子を生んですぐに亡くなった（とりべ野）。その後は東三条院詮子が引き取って世話をした。「這ひるざらせ給ひて、御念誦のさまたげにおはしますに」（同）とあり、女院が病の床にある時も「御懷を離れさせ給はずむつれ奉らせ給を」（同）と訳もわからず甘えていたことがわかる。「はつはな」の巻は、いうまでもなく中宮彰子の第一子敦成親王誕生が書かれている巻であり、その箇所は『紫式部日記』の同記事を参考にしたといわれている。式部も姦子の夭折の件は当然知っていたと思われる。しかし、中関白家の打ち続く不幸の象徴の如き幼い

内親王の死は、『紫式部日記』にも『源氏物語』にも全く影をおとしていない。この他にも歴史物語である『栄花物語』には、死産や幼い子供の死の話は頻繁に出てくる。他記録に見えないものも稀に見られるが、大半は裏付けのある歴史的事実である。現実には子どもの夭折がいかに多かったかがよくわかる。以下にあげる。

・頼通の愛人（永頼四女 山の井の四の君）が頼通の男児を生んだが、女は出産時に亡くなり、男児も「三日ばかりありて、それもうせにけり」（十二たまのむらぎく）

・寛子が小一条院の男児を出産したが、七日で早世「かくて七日もすぎぬ。ころのどかに思さるるに、この今宮御湯より上がらせたまひて、にはかにただ消えに消えいらせたまへば」（十四あさみどり）

・長家室男子を死産「いみじう大きにかめしきをとこ君にて、やがてなくなりてうまれたまへる」（二十七ころものたま）

・女御敏子死産「若宮はうせて生まれさせたまへるとぞ」（三十六根あはせ）

・東宮（尊仁親王）の子を近江守実経女生むが夭折「四、五にてうせたまひにき、伊勢が心地ぞしける」（三十六根あはせ）

・姦子内親王の生んだ男女二人の宮、生後一年未満で夭折「東宮（尊仁親王）の前斎院（姦子内親王）は、男宮・女宮生みたてまつらせたまひしかど、皆うせさせたまひにしかば」（三十七けぶりの後）

・姦子内親王の生んだ東宮尊仁親王の若宮産後間もなく夭折「若宮生まれさせたまひてといふにうせたまひぬ」（三十七けぶりの後）

・後三条帝の女御基子流産「梅童女御、こたみはおろしたてまつらせたまひければ」（三十八松のしづえ）

V、まとめ「暗」を照らす「明」としての子ども

・白河天皇第一皇子敦文親王（四歳）赤裳瘡で亡くなる「内の一の宮、御裳瘡の名残なほおこたらせたまはで、八月六日つひにうせさせたまひぬ」（三十九布引の滝）

IV、説話に見る庶民の子どもの死

①『今昔物語』巻第二十六「東の少女、狗と咋ひ合ひて互に死ぬる語第二十」

（十二三歳許の）女の童、身に病を受けてけり。世の中心地（流行病）にてありけるにや、日來を経るままに病おもかりければ、主此の女の童を外に出さんと為るに「然れば女の童、狗と互に齒を咋ひ違ひてなむ死にて有りける」。

庶民の子どものなんとも凄まじい病氣と死の用例である。集成頭注には「回復の望みのなくなった病者を、その死穢をおそれ捨てるのである」とある。『源氏物語』にはこのような凄惨な子どもの死の例は全くとりあげられていない。ただ、唯一の庶民の子どもの死を暗示するのが本稿の冒頭部分でも触れた「浮舟」の渡し守の孫が宇治川に落ちた挿話である。

女房「先つころ、渡守が孫の童、棹さしはずして落ち入りはべりにける。すべていたづらになる人多かる水にはべり」（浮舟159）
極めて間接的に子どもの死が描かれている。『今昔物語』のような生々しさはなく、膿化された表現である所に『源氏物語』の特徴を指摘できよう。

以上、十二例をあげて他作品や史実の中の子供の死や病氣をみてきた。又、本論を書くに当たって服部敏良氏の『平安時代医学史の研究』（注13）で、疫病の流行や当時の出産、小児病についての医学的知識を学んだ。その結果気付いた点は、子どもの病氣と死に関して『源氏物語』は現実を殆ど反映していないということである。

とくに『源氏物語』では成人前（元服や裳着以前の）子どもの病氣や死の例は皆無である（『源氏物語』中で、最も若い死の用例は、夕顔の十九歳か）。現実には行成の『権記』の記事の如く、多数の子を授かっても幼児死亡率が高く、全員恙なく育つことは困難な時代であったようである。そのような時代背景の元で『源氏物語』では「夕霧」の巻で、夕霧が雲居雁と藤典侍との間に持った十二人の子がすべて「かたはなるなく、いとをかしげに、とりどりに生ひ出でたまひける」（夕霧474）と、殊更理想的に書かれている。『源氏物語』の先行作品である『宇津保物語』にも、同様の子ども列挙が繰り返し見られるのだが、『宇津保物語』には痛ましい子どもの死も書かれている。即ち「菊の宴」で、実忠があて宮に熱をあけて元の妻子を顧みなくなったことを悲しんで、実忠の男児真砂君十三歳が「つひに父君を恋ひつつ亡くなりたまひぬ」（新全集70）という箇所である。『源氏物語』で鬚黒が玉鬘に夢中になる設定は、実忠の話と共通するのだが、鬚黒の子どもたちは若く美しい継母を慕うように描かれ、真砂君のように父を「恋い死に」することはない。このように『源氏物語』では肉体的にも精神的にも子どもが死に追いやられる場面はないのである。ではなぜ式部は現実を無視して、子どもの病氣や死を全く書かなかったのだろうか。次にあげる三つの理

由が考えられる。

一つには男と女の問題を深く描く点に主眼があったため、あえて幼い子どもの死や病気はとりあげなかったという点である。たとえば須磨流謫中の源氏の描写として、京に残した紫の上と幼い夕霧の二人のうち、紫の上に対する思いの方が、どちらかといえばまさっている様子を「なかなかこの道のまどはれぬにやあらむ」(須磨185)と、地の文で古歌(後撰集兼輔詠)のように子の道の闇に迷うことはないのだろうかという皮肉っている箇所などからも、そのような推測がされるのである。

二つめは、式部が安易な御涙頂戴式の子どもの病気や死を描くことを避けたのではないかという解釈である。『源氏物語』の悲劇の原因を、いたいたけな子どもにするという残忍さを、平安貴族の優美な美意識を基盤としていた式部は好まなかったのだと思う。この点が『宇津保物語』では「死」の用例十例中の一例を、父実忠を「恋死にする」十三歳の真砂君にした点と異なっている。『宇津保物語』の作者が男性であることも関係している。

三つめは、式部にとって子どもはあくまでも大人の世界の「暗」を照らす「明」としての存在であったからではないかということである。たとえば成人した光源氏の女性に対する口按摩や、政治的かけひき、女三の宮や柏木に対する一種の陰湿な仕返しなど、理想的主人公といえども、大人になった人物に対しては、狡猾な面やエゴイスト的な面、底意地の悪さすら容赦なく書き込んだ式部であったが、子どもの描写に関する限り、そういう否定的な面は殆ど書かなかった。この点にも憎らしい子どもや、嫌味な子どもの登場する『枕草子』や『栄花物語』との違いが見られる(注14)。

『源氏物語』に登場する子どもは素直で愛らしく極めて健康で、すく

き物であったのであろう。また『源氏物語』の「横笛」にも、源氏が自分の子でないと知りつも薫の美しい成長ぶり見て「まことにこのうきふしみな思し忘れぬべし」と、感嘆する場面がある。人生の「暗」をも「明」に転ずる子どもの力を、式部は実体験を通して認めていたのではないか。だからこそ、ことさら幼い子どもの病気や死を題材にすることを避けたのではないかと思われる。

最後に後続作品への影響について少しだけふれておく。今まであげた『源氏物語』の子ども描写は、後期物語にも基本的には受け継がれていると感ずる。とくに既に指摘されている通り、少女紫の上の登場場面と『狭衣物語』の飛鳥井の姫君の描写の共通性などは明らかである。女二の宮の生んだ若宮にも、東宮時代の冷泉帝や紫の上の少女時代の焼き直しが見られる。また『夜の寝覚』の女主人公にとって、生きる支えとなっているのは石山の姫君やまさこ君、小姫君たちの存在である(注16)。「浜松中納言物語」の児姫君や唐后の生んだ若君も周りの大人たちを明るく照らす存在として造型されている(注17)。しかし、決定的な相違点がある。それは『源氏物語』のみに、「暗」を照らす「明」としての清新な子ども描写をされた人物―紫の上や薫が、後にいかにしてその無邪気で屈託のない子どもらしさを喪失したかが描かれているという点である。『源氏物語』では、子ども描写の双璧といわれている(注18)上述の二名は長ずるに従って、内面に深い苦悩や屈折した思いを抱えた人物として描かれている。つまり、紫式部は子ども描写に独自の新鮮な境地を切り開いたと言いうるし、後続物語もこの点を模倣することに努めた。しかし、その無邪気で無垢な子どもらしさが、いかにして変質し喪失したかという点まで描いたのは『源氏物語』だけなのである。他作品にはこれがない。大人の世界の「暗」を照らす「明」としての子ども

すくと成長する。そして、心身を病んだり、傷ついたりしている大人の憂鬱をしばし忘れさせる存在として活躍している。さらに『源氏物語』では、子どもは病気や死の世界と反対側の存在として描かれることが多い。とりわけ、「若紫」の少女紫の上登場の場面は、瘡病を患っている源氏の不健康を吹き飛ばす如き清新さを感じさせる。又、「幻」で紫の上の死の悲しみに打ちひしがれている源氏を慰め、「生」のかがやきを周囲に撒き散らしていたのは、幼く無邪気な勾宮の言動であった。このように『源氏物語』の子どもは、病気や死の対極にあるものとして意図的に位置付けられていると言える。そしてそこに、作者独自の「子ども観」を指摘できるのではないだろうか。河内山氏は次のように述べている。

『源氏物語』には、紫の上のほかにも、愛くるしい児童の生き生きとした描写が少なくない。たとえば「横笛」「御法」「幻」などの巻における勾宮の愛らしさ。それらが育ち行く幼き者への限らない愛情に裏打ちされた造型であるの言うまでもない。おそろく、『源氏物語』に登場する童児のモデルは、紫式部の身辺にあって、憂鬱や厭世感にのめりこみがちな彼女を、時には慰め支え、そしてまた時には、そのため生きねばならないと奮起させた存在で、豊かな母の愛を一身に受けて育った一賢子であろう(注15)。

Ⅱの『紫式部集』の、病気の賢子を詠んだ歌の難波氏や桑原氏の解釈とも相通する見方であると感ずる。たしかに紫式部にとって、子どもとは河内山氏の指摘のように、大人の憂鬱や厭世感を、しばし忘れさせてくれる存在であり、生への意欲や希望を与えてくれるかけがえのない生

描写の数々は、その主体であった人物たちが大人になって、自らは意識していなかった子ども特有の明るさを失った時に、いっそう輝きを増して読者に思い起こされてくるものではないだろうか。

Ⅵ、補足『源氏物語』以外の文学作品中の子どもの死の例について

なお、補足として『源氏物語』以外の文学作品における子供の病気や死の用例について少し述べておく。以前の例としては、『万葉集』の巻五904、山上憶良の「男子名は古日に恋ふる歌」が印象深い。「白玉のわが子古日」が神々に祈った甲斐もなく、亡くなった時「立ち踊り、足摩りさげ、伏し仰ぎ、胸うち嘆き、手に持てる吾児飛はしつ、世間の道」と、可愛い盛りの子に先立たれた親の悲しみが余すところなく歌われている(但し『万葉集全注』の井村哲夫氏の解説によれば、この古日は憶良自身の子ではないとする説が、どちらかといえば有力なようである)。「源氏物語」には、このような幼児の死の例はないが、子どもの死を嘆き悲しむ親の描写として、内容的に近いものは幾つかある。以下にあげる。

○娘、葵上(二十六歳)の死と、父左大臣、母大宮の嘆き

「袖の上の玉の砕けたりけむよりもあさましげなり」(葵43)

○息子、柏木(三十二、三歳)の死と、父致仕大臣(頭中将)、母北の方の嘆き

「大臣、北の方などは、まして言はむ方なく、我こそ先立ため、世のことわりなくつらいことと焦がれたまへど何のかひなし」

(柏木309)

○娘、浮舟（二十二歳前後）の死（と信じた）母中將の君の悲しみ
「母君も、さらにこの水の音けはひを聞くに、我もまろび入りぬべく、
悲しく心憂きこととどまるべくもあらねば」（蜻蛉214）

しかし、右に年令を書いたように『源氏物語』の死んだ子どもたちは
いずれも年令的には成人であり、親からみれば子どもだが、客観的には
「大人の若死に」とでもいうのがふさわしい。このような点からも、紫
式部がかなり意図的に幼い子どもの死や病氣を書くことを避けたことが
窺われる。

その他『源氏物語』以後の中世の文学作品の子どもの描き方に少しだ
け触れると、『保元物語』『平治物語』『平家物語』などの軍記物には
子どもの死がかなり描かれていることに気付く。しかも、大半は病死で
はなく、戦乱に絡んでの死である。中でも、文学的效果を上げていると
思われるのは、『平家物語』の六代（十歳）があわや死にそうになり、
殊勝に念仏を唱える場面（巻第十二「六代」）や、宗盛の子、副将（八
歳）が、敵の刃を逃れようと乳母の懷に入る場面（巻第十一「副將被斬
」）、そして有名な安德帝（八歳）の二位の尼に抱かれての入水の場面
などである（巻第十一「先帝身投」）。

王朝貴族の文学と、武家を中心としたそれとの差が、子どもの描き方
にも顕著に現れていることを改めて確信した。

（注）

1 西木忠一「死と葬送」『源氏物語講座5』勉誠社・平成三

※なお西木氏には「源氏物語における死について（一）五」「平安
文学研究」五二輯（五六輯・昭和四十九年七月）昭和五十二年十一月に

源氏物語の「死」と「出生」に関する詳細な研究がある。同氏が調査
された源氏物語中における「死」四十三人は、すべて直接描写ではな
く、間接描写も多数含まれていると解説しており、はじめから故人と
して登場する人物も「死」の一例として数える立場をとっている。
2 作り物語の子供描写に関しては石田稷二氏の次のような解釈が一般的
なものであろう。

作り物語とは、本来、男と女の物語である。男、女というのは、男
なら元服、女なら裳着の義をすませた、一人前の男、女の物語である。
成人式を挙げるまでは、だから本来はその部分は、子供のころから、
物語にふさわしい理想的な、ないしは超人的な美質、能力を備えてい
ることが書かれれば、事足りるので、『竹取物語』でも『源氏物語』
でも『宇津保物語』の俊蔭の巻でも、その部分は駆け足ですませる。
（『伊勢物語』角川文庫解説）

だが、長編の源氏物語にいたって、子供描写が飛躍的に進化したこ
とも又事実である。少女紫の上の登場場面や、冷泉帝の東宮時代、赤
ん坊時代の薫描写、あるいは脇役ながら空蟬の弟小君などのいきいき
した子供描写などが開拓されたといえよう。しかし、その源氏物語に
おいても、基本的な子供描写は「（源氏誕生）いとこの世のものな
らずきよら」（桐壺113）であり、いつもにこにここと「（夕霧）笑
がち」（葵70）と機嫌よく、「（明石女御の若宮）物をひきのぶ
るやうにおよすけたまふ」（若菜上103）と急速に成長するという
ものである。伝統的な作り物語の型通りの子供描写と、式部が開拓し
た清新な部分とが混在しているといえよう。現実の世界では頻繁にあ

った幼い子供の病氣や死を写實的に物語にとり入れるという次元とは
やはり隔たりがある。しかし、子供の死のみならず、病氣すら全く書
かなかった点から紫式部独自の子ども観を考察し、そのことが作品に
及ぼしている影響を明らかにすることが本論の主旨である。

3 拙稿「源氏物語の思春期」『国文目白』三十五号・平成八で、一条朝
になって元服年齢の若年化が見られ、『源氏物語』中の元服も村上朝
でなく、一条朝の元服を範としているという中村義雄氏の説が当ては
まることを、表を作成して立証したことがある。

4 藤岡忠美『平安和歌史論』桜楓社・昭和四一

5 河内山清彦『源氏物語の理想的女性』青山短期大学文学部懇話会シリ

ズ・昭和五一

6 清水好子『紫式部』岩波新書・昭和四八

7 稻賀敬二『日本の作家—紫式部—』新典社・昭和五七

8 難波浩『紫式部集全評釈』笠間書院・昭和五八

9 桑原一歌「『紫式部集』五十四番歌の表現方法」難波浩『紫式部の方
法』笠間書院・平成十四。※なお桑原氏は『紫式部集』の本文は難波
浩『紫式部集の研究』校異編 伝本研究編』（笠間書院一九七二年）
を参照されており、表記は岩波文庫『紫式部集』に従っておられるた
め、私の引用する国歌大観（五十三番）とは歌番号が異なっている。

10 馬場あき子『和泉式部』美術公論社・昭和五七

11 服藤早苗『平安朝の母と子』中公新書・平成一

12 注11と同。

13 服部敏良『平安時代医学史の研究』吉川弘文館・昭和六三

14 たとえば『枕草子』には調子に乗った子どもの小憎らしさをあげた章
段として、二五段（にくきもの）・九二段（かたはらいいたきもの）

・二三段（はしたなきもの）・一四七段（人ばへのするもの）があ
り、『栄花物語』では「巻五・浦々の別」の承香殿の女御元子の童女
が「簾の身もはらみたるかな」と、懐妊しない弘徽殿方に痛烈な嫌味
をいっている。『源氏物語』には憎らしい子・嫌味な子・むつかる子
は基本的には登場しない。唯一指摘できる例として「夢浮橋373」
で、浮舟が異父弟の小君のことを「同じところにて見しほどは、いと
さがなく、あやにくにおごりて憎かりしかど」と、思い出す部分があ
る。しかし、成長するに従って、そのような憎らしさは消えて姉弟仲
は良くなったように書いてある。

15 注5と同。

16 たとえば寝覚の上が広沢の入道宅で、美しく育った石山の姫君・まさ
こ君・（大君の遺児の）小姫君がむつれ遊ぶのを見て「よろづの憂さ
も嘆かしさもうち紛れ、慰む心地もし」（巻五1483）とある。

17 吉野の姫君を（唐后の生んだ）若君は母と呼び慕うので、精神の不安
定だった姫君も「もののかなしさも、ゆくへなき心地する身のありさ
まも、こよなくぐさめられて」とある（巻四1389）。

18 仲田庸幸「光君および紫の君の幼児描写の文芸的意義」『源氏物語の
文芸的研究』風間書房・昭和三七

※『源氏物語』の本文は小学館古典文学全集による。括弧内に巻名と頁
数を示した。『栄花物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』の本文は小
学館新編古典文学全集による。また引用した和歌は国歌大観によるが、
一部私に表記を改めた。傍線はすべて筆者によるものである。